

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：33941

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792625

研究課題名(和文)閉経前乳がん患者の「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性

研究課題名(英文)Effectiveness of the intervention program "self-care of heart" in premenopausal breast cancer patients

研究代表者

沼田 葉子 (NUMATA, YOKO)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・研究員

研究者番号：60525070

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者を対象に、血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性を明確にすることを第一目標とし、その結果を反映させたQOL評価として「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性の検証が第二目標である。対象者の治療開始前と治療開始後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月に血中ホルモンの変化、皮膚症状および水分量の変化、心理社会的変化を経時的測定した。結果、閉経前乳がん患者が少ないこと、体調不良等により経時的に測定できない場合があること、最終評価が治療開始12ヵ月後で測定途中である等により統計学的な評価はできなかったが治療に伴う心理的变化の傾向がみられた。

研究成果の概要(英文)：Intended for premenopausal breast cancer patients receiving hormone therapy after surgery, the first goal, to clarify the relevance of the psychological and social changes and changes in the skin due to blood hormone fluctuations, the second goal, the result it is to clarify the effectiveness of intervention programs "self-care heart" as QOL rating reflecting. Treatment before the start of the patient, 1 month after the start of treatment, 3 months, 6 months, 12 months, and over time measured changes in blood hormone, changes in moisture content and skin symptoms, psychosocial change. Result, it is that premenopausal breast cancer patients is small, may not be measured over time by poor health, etc., the final evaluation is measured prematurely 12 months starting treatment, It was not possible statistical evaluation, but the tendency of psychological changes associated with the treatment were observed.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護学 周手術期看護学 精神的ケア

1. 研究開始当初の背景

近年では、乳がん罹患率が上昇し、結婚、出産、子育て等の家庭や社会での中心的役割を担うライフステージにある閉経前乳がん患者の増加も認められる。ホルモン療法による急激なホルモン抑制は、閉経前の患者の身体的変化だけでなく、心理社会的な健康障害をもたらす。国内では、術後1年後のQOL悪化予測因子として、術後1ヶ月目の気分障害や不良なボディイメージが報告されている。また、患者の38%がうつ状態であることも指摘されている。

(1)術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者の血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性

ホルモンレセプター陽性の閉経前乳がん患者に対する術後ホルモン療法は、LH-RH analog (以下 LH-RHa) とタモキシフェンの投与 (J Clin Oncol 2002 20;4628-4635) が一般的となっている。治療が開始されると、約3か月で血中E2濃度は30pg/mL以下の閉経状態となり、それに伴い hot flash (ほてり、発汗)、痤瘡、皮膚乾燥、膣乾燥感、不眠症、頭痛、情緒不安定 (抑うつ) 等が現れる。また長期投与により骨密度の低下や心血管系への影響も起きる。これらの症状は自然閉経の場合に比べてより高頻度かつ高度であるため、身体的変化に伴う心理社会的影響との関連性が示唆される (Eur J Cancer.2007 43;1646-1653.)。具体的には、手術による乳房の変化に加え、急激な女性ホルモン (主にE2) 抑制により皮膚の乾燥、掻痒感、「化粧のりが悪い」等の皮膚に関連した症状の訴えが多い。一女性としての美容上の概念も含めたボディイメージの悪化が引き金となり、心理社会性への影響が発生すると予想される。しかし、実際に閉経前の患者の急激な血中ホルモン変動と皮膚症状および水分量の変化、さらには気分、感情等の心理社会的影響との関連性を評価した報告はみられない。

(2)閉経前乳がん患者への構造化した介入プログラムの有効性の検証

乳がん治療は集学的治療であるため、身体的、心理社会的サポートとなる専門的知識とケア技術を基とした多面的な看護アプローチが必要となる (日本臨床.2006 64(3); 409-416. 日がん看誌.2004 2;62-68)。乳がん患者を対象とした研究は多岐にわたるが、患者の身体的、心理的变化を題材とした疾病生成論的な観点からの報告が主であり、患者ががんと共に生きる「病を生きる力」「逆境を生きる力」等の健康生成論的な観点からのサポートに関連する報告は少ない。術後の治療や年齢により問題点は様々であるが、術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者のライフステージに合わせた身体的、心理社会的サポートが重要であると考えられる。

2. 研究の目的

術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者を対象に、血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性を明確にすることを第一目標とし、次に、その結果を反映させた QOL 評価として「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性の検証を第二目標とする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者。除外基準は、精神疾患の治療中の患者。

(2) 調査方法

ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者の初回外来受診時に、研究概要を説明し、同意の得られた者を研究対象者とした。

血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性。

術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者の血中ホルモンの変化、皮膚症状および水分量の変化、心理社会的変化を測定するため、血中ホルモンの変化は採血データを参照し (治療結果の参照)、皮膚症状および水分量の変化については、皮膚計測器 Derma Unit SSC3 (油分・水分・PH 一体型デバイス sm815/cm825/PH905) を使用し、プローブを皮膚にあて測定した。心理社会的変化については、評価尺度として日本語版 POMS 短縮版および 13 項目 5 件法版 SOC (首尾一貫感覚) の調査票を使用し記入内容を測定した。測定時期は、治療開始前と治療開始後 1 ヶ月、3 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月に経時的に測定した。

対象者の背景は、診療録より術式、術後日数、病期、治療内容、年齢、家族構成、職業の有無のデータ収集を行った。

「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性の検証。

対象者に介入プログラム (グループワーク) への参加を促し、参加できる者を介入群、参加できないが評価尺度の調査票の記入に協力してくれる者を非介入群に分別する。

介入群には、構造化した「こころのセルフケア」介入プログラムを実施する。プログラムの構成は、対象者を 5~6 名程度に固定し、1 コース 4 回、1 回 90 分を週 1 回行う。実施内容は、1) 教育的介入 (テーマ; 乳がんとうつ、情報収集の必要性、自分らしく生きる工夫)、2) 問題解決技法、3) 支援的精神療法 (患者の主体的交流によるピアサポート) である。介入群は、介入前と介入後に、気分や感情の評価尺度である日本語版 POMS 短縮版、「生きる力」等が焦点の 13 項目 5 件法版 SOC (首尾一貫感覚) の調

査票を記入しアウトカム評価を行う。
非介入群には、グループワークには参加できないが、介入群と同じ期間に評価をするため、初回実施し、その4週間後(介入群での4回目)に評価尺度である日本語版 POMS 短縮版、13項目5件法版 SOC(首尾一貫感覚)の調査票を記入しアウトカム評価等を行う。

(3) 調査内容

血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性

皮膚計測器 Derma Unit SSC3(油分・水分・PH 一体型デバイス sm815/cm825/PH905)
皮膚表面から約 15 μm(主に角層)に含まれる「水分量」を非侵襲的かつ定量的に瞬時に測定できる。水分以外の物質の影響を受けにくく、再現性の高い測定が可能である。
皮膚ボディイメージ評価尺度(CBIS)

Skindex-16 日本語版

日本における対象者のボディイメージ(BI)を適確に評価する実用的かつ国際的に通用する尺度である。Gupta らにより考案され、計量心理学的検討を行いその妥当性が確認されている。症状・感情・機能の3つの下位尺度に属する16項目の質問からなり、患者は過去1週間に最も悩まされた皮膚症状について、悩まされた程度を0「全く悩まされなかった」から7「いつも悩まされた」の8段階選択肢から選択する。得点は、0~100までのスコアに変換され、スコアが高いほどQOLが低いことを示す。

13項目5件法版 SOC(sense of coherence) 首尾一貫感覚(ストレス対処能力とも言われる)SOCは、「生きる力」「健康への力」であり、自己や環境に起きている出来事を把握できる感覚「把握可能感」、人生における出来事は対処可能な経験であるとみなす感覚「処理可能感」、動機付けの要素であり、人生を意味があると感じている程度「有意味感」の要素からなる。また、個人が生まれ持った性格特性ではなく、人生経験の中で後天的に学びとられる学習性の感覚である。下位尺度 把握可能感5項目、処理可能感4項目、有意味感4項目で構成され、1. とてもよい~4. よくない、の4段階回答をSOC得点として評価する。点数が高いほどSOCが強いことを示す。SOCの高い人はストレスフルな出来事への精神健康へのダメージを受けにくいだけでなく、死亡や障害に陥る確率が低いことも示されている。(Breast Cancer Res Treat1999 56;45-57. Qual Life Res2004 13(9);1518.)

日本語版 POMS 短縮版

「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の6つの尺度から気分や感情の状態を測定する。「緊張」「抑うつ」「怒り」「疲

勞」「混乱」は高いほど、「活気」低いほどその状態を示す。

血中ホルモン値

血清 E2、FSH、LH と一般採血結果および治療関連の結果データの参照。

「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性の検証

介入プログラムの有効性を明確にするため、気分や感情の評価尺度である日本語版 POMS 短縮版、「生きる力」等が焦点の13項目5件法版 SOC(首尾一貫感覚)にて評価する。

介入群には、構造化した「こころのセルフケア」介入プログラムを実施する。プログラムの構成は、対象者を5~6名程度に固定し、1コース4回、1回90分を週1回行う。実施内容は、1)教育的介入(テーマ; 乳がんとうつ、情報収集の必要性、自分らしく生きる工夫)、2)問題解決技法、3)支援的精神療法(患者の主体的交流によるピアサポート)である。介入群は、介入前と介入後に、気分や感情の評価尺度である日本語版 POMS 短縮版、「生きる力」等が焦点の13項目5件法版 SOC(首尾一貫感覚)の調査票を記入しアウトカム評価を行う。

非介入群には、グループワークには参加できないが、介入群と同じ期間に評価をするため、初回実施し、その4週間後(介入群での4回目)に評価尺度である日本語版 POMS 短縮版、13項目5件法版 SOC(首尾一貫感覚)の調査票を記入しアウトカム評価等を行う。

4. 研究成果

本研究は、術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者を対象に、血中ホルモン変動に伴う皮膚の変化と心理社会的変化との関連性を明確にすることを第一目標とし、次にその結果を反映させたQOL評価として「こころのセルフケア」介入プログラムの有効性の検証を第二目標としていた。

ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者の初回外来受診時に、研究概要を説明し、同意の得られた者を研究対象者とした。精神疾患の治療中の患者は除外した。

外来にて対象者の血中ホルモンの変化、皮膚症状および水分量の変化、心理社会的変化の測定するため、血中ホルモンの変化は採血データを参照し、皮膚症状および水分量の変化については、皮膚計測器 Derma Unit SSC3(油分・水分・PH 一体型デバイス sm815/cm825/PH905)を使用し、プローブを皮膚にあて測定した。心理社会的変化については、評価尺度として日本語版 POMS 短縮版および13項目5件法版 SOC(首尾一貫感覚)の調査票を記入した。測定時期は、治療開始前と治療開始後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月

月の経時的測定である。

結果、研究対象である閉経前乳がん患者が閉経後乳がん患者に比べて少ないこと、治療中であり体調不良等による中断のため経時的に測定できない場合があったこと、また対象者一人に対する最終評価が治療開始 12 カ月後である等により統計学的な評価はできなかったが治療に伴う心理的变化の傾向がみられた。ホルモン療法に伴う変化は、hot flash(ほてり、発汗)、皮膚乾燥、不眠症、情緒不安定(抑うつ)等が現われ、これらの症状は自然閉経の場合に比べてより高頻度かつ高度であり、身体的変化に伴う心理社会的影響との関連性が示唆されている(Eur J Cancer.2007 43;1646-1653.)。また、国内では、術後1年後のQOL悪化予測因子として、術後1ヶ月目の気分障害や不良なボディイメージが報告されている。乳がんは集学的治療であり、身体的、心理社会的サポートとなる専門的知識とケア技術を基とした多面的な看護アプローチが必要となるため(日本臨床.2006 64(3); 409-416.)。今後は、術後ホルモン療法を受ける閉経前乳がん患者ががんと共に生きる「病を生きる力」「逆境を生きる力」等の健康生成論的な観点も含めて身体的、心理社会的サポートが重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼田葉子 (NUMATA YOKO)

研究者番号: 60525070

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: